

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24年 5月 23日現在

機関番号：32635

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520595

研究課題名（和文）第二言語の文章構成に見られる文化的差異の研究

研究課題名（英文）A Study of Cultural Differences in Second Language Sentence Structure

研究代表者

西蔭 浩子（NISHIKAGE HIROKO）

大正大学・表現学部・教授

研究者番号：00297079

研究成果の概要（和文）：学習者は自らの文化的背景に影響をうけた思考回路をもち、それが論理構成そのものに差異を生じさせていると捉え、その差異を知ることが外国語学習過程において良い影響を与えるのではないかという推測のもと、日本語の表現が英語、中国語、韓国語でどのように表現されているのかを日本国内の公的な刊行物を用い、比較した。その結果、それぞれの言語を支える文化的基盤が文章構成にも大きく影響を及ぼしていることを再確認した。そこから、日本語の文章構成の特徴を把握した上で、目標言語の特徴を捉えることができれば、学習者の日本語の「負の転移」が目標言語に対する学習戦略として非常に有効であることを示唆する。

研究成果の概要（英文）：This study begins with the idea that each language learner has his or her own way of logical thinking, which is affected by each one's cultural background. With the assumption that knowing these differences and utilizing them would work positively on each learner's process of language learning, we compared how similarly or differently certain things were described in the following four languages: Japanese, English, Chinese and Korean. We analyzed sentences that appeared in Japanese public documents and their translations into the other languages mentioned above. We recognize the words and sentences there are strongly affected by each language's cultural background. Thus, we suggest that "negative transfer" in studying foreign languages will become a good learning strategy if a learner comes to realize characteristics of sentence structures well enough in both the first and the target language.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：外国語・中国語・英語・韓国語・日本語・第二言語・外国語教育・異文化コミュニケーション

## 1. 研究開始当初の背景

外国語習得過程において母語の構造がマイナスに働くとされる「負の転移」を学習者の文化的アイデンティティを支えるものと

して肯定し、日本人学習者が学習戦略 (learning strategy) として積極的に利用すべきであると考え、日本語・英語・中国語・韓国語の四言語を対象に研究してきた。平成1

7～18年度大正大学学術研究助成金を受け「日本語母語話者に対するレトリックに重点を置いた外国語教授法に関する研究」、平成19～21年度日本私立学校振興・共済事業団学術研究振興資金を受け「日本語母語話者に対する外国語教授法の研究」を行ってきた。上記の研究の結果、学習者が母語の干渉を受けていることを再認識することができ、母語である日本語の特徴を知ることが外国語習得の学習戦略のひとつとなることも確認できた。

## 2. 研究の目的

本研究の最大の特色は、日本語・英語・中国語・韓国語の四言語を対照する、多言語の比較研究にある。目標言語(TL)として上記の三言語を選択した最大の理由は、近年における学習者数にある。先行研究の結果、文法や語彙の知識を超えた、母語の文化的背景の強い影響が見られた。このことから、文化的背景は、言語表現に先立つ思考回路、すなわち論理構成(logic)そのものに差異を与えているのではないかと推測するに至った。本研究では、四言語の文化的差異をより明確に、具体的に知るために情緒的な表現を極力省いた公的な刊行物を選び、日本語の表現が英語・中国語・韓国語ではどのように表現されているかの比較を試みた。

## 3. 研究の方法

### (1) 資料収集

日本語・英語・中国語・韓国語の四カ国語表記のあるものの収集

- ①区役所などで発行している公文書書類
- ②各種聴き取り扱い説明書類
- ③ホテルパンフレット類(館内案内・防災案内など)
- ④ガイドブック・観光地パンフレット類

### (2) 資料分析

四カ国語の差異を見出すためには、日本語の内容を極力忠実に翻訳する必要のあるもの、さらに日本語の内容に日本における文化的背景がよく反映されているものを対象とすることが有効であるとの結論に達し、収集した資料の中から以下の二点を選び、分析のための主要テキストとした。

- ①『東京都北区国民保護計画(概要版)』
- ②『いざというとき、どうするか—地震に自信を』

### (3) 実地調査

- ①阪神・淡路大震災で大きな被害を被った神戸の防災関連の施設訪問。翻訳・通訳を中心に外国人居住者などに対する実際の対応やそのシステムなどに関する工夫などについての調査。訪問施設は以下の通り

である。

- ・「阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター」
  - ・「公益財団法人神戸国際協力交流センター」
  - ・「神戸市役所国際交流推進部」
- ②外国人居住者に対する活動、特に外国語で情報を正確に伝えようとする場合の問題点や工夫についての取材と意見交換。・多言語センターFACIL

## (4) 講演会

- ①「日本語のあいまい性『ちょっと』を例に」2011年7月2日  
武蔵野大学大学院教授 佐々木瑞枝先生
- ②「精神科診療・ことば・文化」2011年12月10日  
大正大学人間学部教授 野田文隆先生

## 4. 研究成果

3年間の本研究、及び先行する4年間の研究会活動をとおして、外国語教授法を多角的に考察した。特に本研究が特徴的なことの一つは、日本語、英語、中国語、韓国語という多言語の比較研究であることが、第一に挙げられる。これらの言語を対象にしたのは、近年日本における学習者数が英語のみならず、中国語、韓国語において増加を見ていることが大きな理由であることは否めないが、それは単に便宜的な選択ではなかったことが、本研究によって確認された大きな成果である。つまり、同じアジア文化圏の中国語、韓国語と比較研究することで、文化的背景が近いと考えられる日・中・韓の根強い文化的背景差がそれぞれの言語に反映されていることを確認できた。文化圏の大きく異なる英語圏のみならず、近いと考えられるアジア圏との比較においても、日本語の特徴として、あいまい表現や和を重んじる表現が多く確認できたこと、しかも資料として用いたものが、極力情緒的表現を省いた公的な刊行物であったにもかかわらず、この日本語の特徴が浮き彫りになったのは、特筆すべき成果である。

次に挙げられる点は、外国語を学ぶ過程でそれぞれの母語が様々に干渉する様子が浮き彫りになるだけでなく、それに加え、外国語を母語に翻訳する過程においても、自身の母語が外国語の干渉を受けるという、いわゆる相互作用が観察された点である。この互いにおける干渉は、それぞれの文化的基盤においては考えられず、一方で自身の文化的基盤がなければ外国語学習の基盤もまたない、ということを考えれば、言語学習において、単に語彙や文型を形式的に学ぶだけでなく、それらの背景となる文化的基盤を理解する努力

が不可欠であることが改めて確認された。「負の転移」を学習戦略として利用していく根拠を得たことになる。具体的には「日本語の曖昧表現」、「責任逃れの日本語表現」というキーワードが浮上し、それらが日本語母語話者が外国語を学ぶ際に「負の転移」としてかなりおおきな影響を及ぼしているのではないかという仮説を得ることができた。それは、必ずや今後更に日本語・英語・中国語・韓国語における比較研究を進めていくための足がかりになるはずである。これら本研究の成果は、大きな収穫であると同時に本研究の更なる遂行の必要性を確信することでもあった。また、本研究は単に外国語教育における研究の範疇に留まらず、広く比較文化的研究に対しても貢献できる可能性が高いことを確信するに至った。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 11 件)

- ① 平石淑子、日本語と中国語の受身文一和文中訳指導に関する試論、大正大学研究紀要第 9 6 号、査読無、2011、112-119
- ② 岩佐靖夫、日本語教育における類義語指導の一考察—系統的な指導原理へ向けての提言—、尚美学園大学総合政策研究紀要第 2 0 号、査読無、2011、17-24
- ③ 平石淑子、中国語の動詞に後置される”到”について—日本語の視点から、大正大学大学院研究論集第 3 4 号、査読無、2010、313-330
- ④ 田村雅昭、「ジャパニーズイングリッシュ」の可能性を探る、大正大学研究紀要第 9 5 号、査読無、2010、152-161
- ⑤ 西蔭浩子、「オール・イングリッシュ」における日本人教師の役割、『ACORN』米沢英語研究懇話会機関誌第 2 3 号、査読無、2009、2-3
- ⑥ 平石淑子、日中両言語の差異に関するノート—芥川龍之介「羅生門」を手がかりとして、大正大学研究紀要第 9 4 号、査読無、2009、158-169

[学会発表] (計 4 件)

- ① 西蔭浩子、自律：こどもからおとなまでの学習を支援する放送教育の現場、第 1 9 回 J A C E T 春季英語教員セミナー、2010 年 3 月 22 日、早稲田大学

- ② 西蔭浩子、テレビで伝える英語のつぼ、日本時事英語学会東日本地区研究例会、2010 年 3 月 13 日、青山学院大学

- ③ 西蔭浩子、日本語を利用した英語教育のこころみ—NHK 教育テレビ『英語が伝わる! 100 のツボ』より、J A C E T 関東支部月例研究会、2009 年 10 月 17 日、旺文社センター

- ④ 片桐史尚、日本語教師のやりがいと楽しさ—教室で求められる日本語教育能力とは何か?—、一般社団法人/全国日本語教師養成協議会、2009 年 3 月 28 日、国立オリンピック記念青少年総合センター

[図書] (計 11 件)

- ① 西蔭浩子『英語リスニングのお医者さん 集中治療編』ジャパンタイムズ、2011 年、全 217 頁
- ② 平石淑子・田村雅昭・岡野恵・古家聡・片桐史尚・岩佐靖夫・孔令敬・権在淑・北原スマ子『論集 外から見た日本語内から見た日本語—よりよりコミュニケーションのために—』大正大学 S L A 研究会、2011 年、全 132 頁
- ③ 西蔭浩子・田村雅昭・平石淑子・孔令敬・権在淑『ホテル・旅館で使う英中韓 3 か国語きほん接客フレーズ』研究社、2010 年、全 172 頁
- ④ 西蔭浩子・田村雅昭・平石淑子・孔令敬・権在淑『レストラン・お店で使う英中韓 3 か国語きほん接客フレーズ』研究社、2010 年、全 172 頁
- ⑤ 西蔭浩子、「現代世界を知るための外国語教養」『「教養」のリメイク——大学生のために』編者 司馬春英・星川啓慈、大正大学出版会、2010 年、273-295
- ⑥ 古家聡・片桐史尚・岩佐靖夫・孔令敬・権在淑・宛金章・小笹克行『シンポジウム日本語母語話者の第二言語習得における問題点—英語・中国語の場合—予稿集』大正大学 S L A 研究会、2010 年、全 170 頁
- ⑦ 西蔭浩子・トムディロン『英語で話すための日本図解事典』(共著)、小学館、2009 年、全 284 頁
- ⑧ 西蔭浩子『日本人がはまる英会話の落とし穴』旺文社、2009 年、全 199 頁
- ⑨ 西蔭浩子 『英語リスニングのお医者さん

[改訂新版] ジャパンタイムズ、2009年、  
全167頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西蔭 浩子 (NISHIKAGE HIROKO )  
大正大学表現学部教授  
研究者番号：00297079

(2) 研究分担者

平石 淑子 (HIRAISHI YOSHIKO )  
日本女子大学文学部教授  
研究者番号：90307132

田村 雅昭 (TAMURA MASAOKI)  
大正大学表現学部講師  
研究者番号：60407640

(3) 連携研究者

片桐 史尚 (KATAGIRI FUMITAKA)  
明海大学外国語学部教授  
研究者番号：10316680

岩佐 靖夫 (IWASA YASUO)  
明海大学外国語学部講師  
研究者番号：60448909

孔 令敬 (Kong Lingjing)  
大正大学非常勤講師  
研究者番号：30449110

権 在淑 (Kwon Jaesuk)  
上智大学非常勤講師  
研究者番号：10275977